

まえがき

大阪市立科学館館長 高橋 憲明



このたび大阪市立電気科学館の思い出をもとに、史料が編纂されたことに限りない喜びを覚えます。

大阪市立電気科学館が、我国最初の科学館として四ツ橋に開館したのは昭和12年（西暦1937年）のことでした。その時からすでに70年以上が経過しました。東洋で初めて導入されたプラネタリウム投影機はじめ、数々の当時最新の科学展示から刺激を受け、実際に科学研究に入られた方々は少なくありません。また、当時の思い出、感激を今日まで持ち続けられている方も極めて多いと聞きます。時は移り平成に入った5月末、電気科学館は閉館となりました。その年10月にかつての大阪大学理学部の跡地に大阪市立科学館が電気科学館の後継館として開館の運びとなりました。それからでもすでに20年近くが経過しています。

大阪市立電気科学館開設70年を機に昨平成19年（2007年）に、電気科学館を愛して下さる多くの方々に資料のご提供、思い出のご寄稿を依頼、募集いたしました。50名に及ぶ方々からお寄せ頂いた資料の多くは昨年9月から12月にかけて、「電気科学館70年思い出の写真展」として展示致しました。それらに加えて、大阪市立科学館に保存されている資料を併せ編纂したものが本誌であります。貴重な資料を保存され、それらを提供された方々、大切な思い出を寄稿された方々に、心から厚くお礼を申し上げます。編纂に当たって中心となって努力された編集長加藤賢一学芸課長は大阪市立電気科学館時代から現在の大阪市立科学館に至るまで勤められている、まさに大阪の科学館を知り尽くした人と言えます。なかなか、目にする事の出来ない、いくつかの研究調査がここに再録されているのも嬉しいことです。また、編集や装丁を担当された学芸課の人たちの努力に感謝致します。

大阪駅あたりでタクシーに乗り、中之島の大阪市立科学館までと云いますと、時々、今だに「あゝ、電気科学館でっか」との答えが返ってます。さすがに、「四ツ橋の間違いとちがいまっか」と言う人はまずなくなってきたにしましても、考えてみますと、大阪市立電気科学館は大阪人にとって、あるいは関西人にとって、いや、ひょっとしたら日本人にとっても然とした存在のように思えてなりません。

開設当時の電気科学館の入場券、冊子、プログラムなど感激の一端を物語ってくれる

資料や、新聞雑誌などの記事が、よく戦火に耐えて保存されていたものだと感激致します。昭和40年に開業した地下鉄四ツ橋駅は電気科学館と一体になっていたようで、その様子も資料から窺えます。今日、四ツ橋の駅に立ちますと街路は様変わりして、古き良き時代を偲ぶ余地もないようですが、何と当時の電気科学館を彷彿とさせる建物がその場に君臨しているではありませんか。何よりの記録と云って良いでしょう。言うまでもありませんが、当初のカール・ツァイス製のプラネタリウム投影機は大阪市の有形文化財として、動態保存ではないにしても、大阪市立科学館のプラネタリウム入り口に展示してあります。

毎年70万人に達する入場者を見る大阪市立科学館ですが、昔の記録を見ますと電気科学館も毎年何十万もの入場者を記録し、昭和30年に68万人の年間最高記録を建てたことも見られます。また、大阪市立科学館では電気科学館の伝統を受け継ぎ、ここで成長した若者が国際物理オリンピックで金メダルを獲得されるなど成果が上がって来ています。嬉しいことに最近では若い人たちの姿もよく見かけるようになって来ました。

この冊子が思い出だけにとどまらず、子どもたち、若い人たちもかつての大阪市立電気科学館に思いを馳せ、新しい大阪市立科学館をとおして科学に関する多くの刺激を得て貰えるものと信じます。